

# 定年退職後の男性高齢者の社会参加活動の状態と 社会参加活動に対する思いの特徴

竹中友希・征矢野あや子

## 要旨

目的：定年退職後の男性高齢者の社会・奉仕活動の状態と社会参加活動に対する思いと属性による特徴を明らかにし、その思いに応じた社会・奉仕活動への参加を推進する方策を検討する。

方法：対象者はA地区在住の60歳以上75歳未満の定年退職を経験した男性87名(69.7±3.5歳)で、質問紙調査(年齢、居住年数、社会活動性指標、主観的健康感、経済的な暮らし向き、外出時の身体の不快感、社会参加活動への思い質問票(自作))を実施した。社会参加活動への思い質問票項目の回答の分布状況や、個人属性による社会参加活動への思いの特徴をクロス集計から確認した。本研究倫理委員会の承認後に実施した。

結果：社会・奉仕活動は60歳代よりも70歳代前半の方が行っていた。属性による社会参加活動への思いとして「地域への参加」は20年以上居住、健康、外出時の身体の不快感がない、暮らし向きが心配な群が肯定的な回答だった。

考察：地域に貢献したいという思いを活かし健康状態や経済状況、年齢にあわせた社会・奉仕活動への参加の形を工夫することが必要である。

キーワード：退職、男性高齢者、社会参加活動

## I. はじめに

日本は2021年の65歳以上人口が3,621万人で高齢化率は28.9%となっている(総務省, 2022)。団塊の世代が75歳以上となる2025年以降は、国民の医療や介護の需要が、さらに増加することが見込まれており、地域包括ケアシステムの構築が推進される必要性が高まっている。それと同時に、高齢者の社会参加をより一層推進することを通じて、元気な高齢者が生活支援の担い手として活躍するなど、高齢者が社会的役割をもつことで、生きがいや介護予防にもつなげる取り組み(厚生労働省, 2013)の重要性が謳われている。

高齢者の社会参加活動は、高齢者にとって、社会参加に関するどのような要因が健康維持に寄与しているかは明らかではないが、抑うつ傾向の軽減や認知機能の維持・改善効果が特に期待できる(東京都健康長寿医療センター, 2018)ことや、社会的な役割を担うことで、閉じこもりの防止となり、介護予防にも繋がる(山元, 2016)こと、グループ活動の種類ではボランティア活動に月1回以上参加している方が生活機能の維持に繋がる(Nonakaら, 2017)と報告されてい

る。よって社会参加活動を行うことで、心身ともに健康を維持して住み慣れた地域で暮らしていくことにつながる。しかし、仕事中心の生活を送ってきた男性は、会社員時代のように、ルールやメンバーが分かっている世界から、それらも分からない未知の地域社会の世界に入ることはかなりの勇気が必要であり、それが1つの障壁になって(片桐, 2012)、退職後、地域にて社会参加活動をすることは容易なことではない現状がある。

退職後の男性高齢者の社会参加活動への思いとして、老後は自分のために時間を使うことを楽しみにしたり(吉野, 2015a)、自分に向き合い穏やかな暮らしを求めたり(長徳ら, 2007)、健康を維持しようとする(片桐, 2012; 北島, 加藤, 横山, 2018)思いがある。そうした中、これまで仕事のために目を向けていなかった地域に関心を抱き、居住者として地域貢献したいという思いや、地域の人とつながりを持ちたいという思いをもつ(船山, 堀口, 辻本, 丸井, 2007; 片桐, 2012; 吉野, 2015a; 北島ら, 2018)。地域の活動に参加するきっかけを得て、そこに自分の存在する価値を見出し(吉野, 2015a)、刺激を受けて社会参加が促進され、自尊感情も高まり生きがいとなる(長徳ら, 2007)。地域の中で自分の役割や必要とされている実感をもつことは、地域の一員という意識を持ち、地域に貢献できる場を持つことにつながる(吉野, 2015a)。

これらの社会参加活動への思いについてはインタビュー調査によって質的に明らかとなっているが、量的な調査によって一般化はされていない。そこで定年退職した男性高齢者の社会参加活動への思いの実態を把握し、対象者の属性によってどんな特徴があるかを明らかにする。また、本研究ではそれぞれの特徴に合わせた社会・奉仕活動を促す支援について考えることにつながるため、質問項目に対して回答の傾向を分析することとする。

## II. 目 的

定年退職後の男性高齢者の社会・奉仕活動の状態と社会参加活動に対する思いと属性による特徴を明らかにし、その思いに応じて社会・奉仕活動を促す方策を考察する。

## III. 用語の定義

社会参加活動は金ら(2004)が用いた「社会と接触する活動、家庭外での対人活動」のうちの社会・奉仕活動とする。定年退職は制度によりある一定の年齢で職を辞することとする。定年退職後の男性高齢者は本研究では定年退職を経験した人とし、現在再雇用、再就職等して就労している人も含む。また、完全に退職している(収入を得る仕事をしていない)人の中に、臨時で社会参加活動として仕事をしている人も含む。

## IV. 方 法

### 1. 調査方法

#### 1) 対象者

対象者はA地区在住の60歳以上75歳未満の定年退職を経験した男性高齢者200名とした。A地区の背景として、かつては農村だったが戦後バイパス道路や高速道路、鉄道が整備され、高度経済成長期以降は宅地化が進み市街地のベッドタウンとなっている。1990年に高齢化率は10%以下であったが現在は30%を超えており、近隣の地区と比較して急激に高齢化が進んでいる。

#### 2) 研究期間：2020年9月～2021年3月

#### 3) データ収集方法

データ収集は自記式質問紙を用いた。質問紙の配布の手順は次の通りである。A地区の社会福祉協議会(以下、研究協力者)を通じて、高齢者の集まる場の参加者のうち、条件に該当する人を研究対象とした。また、高齢者の集まる場の参加者の家族や友人等のうち研究対象者の条件に該当する人をもつ人を研究対象者の縁者とし、研究対象者の縁者を通して協力依頼された人も研究対象とした。縁者を通して研究対象者への配布を依頼することで、活動に参加している研究対象者だけでなく、活動していない研究対象者にもアクセスできると考えたためであった。研究対象者には、研究協力が可能な場合、同意チェック項目と質問票の記入後、返信用封筒に入れて、郵便で返送してもらった。

#### 4) 調査項目

##### 1. 個人属性

個人属性として、年齢、居住年数、健康状態、経済状況を調査した。健康状態については主観的健康感と外出時の身体のだらさを問う。主観的健康感は「よい」、「まあよい」、「あまりよくない」、「よくない」の4件法を用いた。外出時の身体のだらさは桂、佐藤(2017)の研究を参考に、「外出することはつらくない」、「外出できるが少しつらい」、「外出できるがかなりつらい」、「外出できないほどつらい」の4件法を用いた。

経済状況については、経済的な暮らし向きについて「家計にゆとりがあり、全く心配なく暮らしている」、「家計にあまりゆとりはないがそれほど心配なく暮らしている」、「家計にゆとりがなく、多少心配である」、「家計が苦しく、非常に心配である」の4件法を用いた。

## 2. 社会活動性指標

社会参加活動状況については、橋本ら(1997)が開発した社会活動性指標を、金ら(2004)が変更したもの(一人暮らしや高齢夫婦のみの世帯が増えている背景から、個人活動の「お寺参り」を「同居以外の人との外食」に変更)を使用する。金ら(2004)は社会・奉仕活動の「趣味の活動」を削除し、「宗教関係の活動」と「消費者団体・自然環境保護などの活動」が追加され7項目となっていたが、大川(2019)の調査から趣味の活動を行っている高齢者がある程度いるため、社会・奉仕活動は変更せずに使用することとした。橋本らは、玉腰ら(1994)の「高齢者が社会的に活動性が高いと考える活動」の調査結果で得られた項目に基づいて項目の選定を行っており、内的妥当性を有するものと考えられている。回答肢は金らの研究から「ほとんど毎日」、「週に3～5回」、「週に1～2回」、「月に1～3回」、「年に4～9回」、「年に1～3回」、「ほとんどない」の7件法として、「ほとんどない」を0点、それ以外の回答を1点とした。

## 3. 社会参加活動への思い

「社会参加活動への思い」質問票(暫定版)を自作した。質問票の作成には、吉野(2015a, 2015b)、北島ら(2018)、長徳ら(2007)、船山ら(2007)、片桐(2012)、小野寺、齋藤(2008)の定年退職後の男性高齢者の社会参加活動への思いについてや、参加のきっかけについて、インタビュー調査の結果からアイテムプール81項目を作成した。そこから、社会参加活動を通して得られた思いが表現されているものに関しては、今回社会参加活動に至るまでの思いに焦点を当てたいため除外した。さらに「定年退職前の参加の経験」といった社会参加活動に影響を与える要因と考えられる項目は個人属性に含めることとした。以上より、50項目となった。さらに50項目から男性高齢者の社会参加活動への思いが表れている25項目を「社会参加活動への思い」質問票(暫定版)とした。

「社会参加活動への思い」質問票(暫定版)の回答方式は思いの測定であることから双極性尺度を用い、5件法を用いて5点「そう思う」、4点「どちらかと言えばそう思う」、3点「どちらでもない」、2点「どちらかと言えばそう思わない」、1点「思わない」のリッカート尺度による単一回答とした。

これらの過程は、高齢者支援に携わる専門家からスーパーバイズを受けた。

## 2. 分析方法

データの分析には、分析ソフト SPSSver.24を使用した。

### 1) 社会参加活動への思いの因子妥当性と内的整合性

「社会参加活動への思い」質問票(暫定版)の欠損値分析、項目分析、探索的因子分析を行い、「社会参加活動への思い」質問票(暫定版)の一つの因子の負荷量が0.4以上、かつ他の因子への負荷量が0.4未満の項目を残して、それ以外の項目を削除した。尺度の内的整合性を検定するため Cronbach の  $\alpha$  係数を尺度全体、各下位尺度について算出した。これら項目の精選を経た

ものを、「社会参加活動への思い」質問票(以下「社会参加活動への思い」とした)とした。

## 2) 社会参加活動への思いに関する特徴

作成した「社会参加活動への思い」の回答の記述統計量から各項目の回答の特徴を把握ため、グラフからデータの分布状況を確認した。また、個人属性と「社会参加活動への思い」とのクロス集計(割合)から属性による社会参加活動への思いの特徴を探索した。

## 3) 社会活動の実態

社会活動性指標の主に社会・奉仕活動に焦点をあてて、平均値を算出した。

## 3. 倫理的配慮

本研究は京都橘大学研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号20-25)。研究協力者と研究対象者に対して、以下の要領で倫理的配慮を実施した。研究協力者へは、依頼文書を用いて研究の概要、目的、意義、方法、期待される利益、予測されるリスクを説明し、自由意思によるものであり、協力をしなくても不利益が生じることは一切ないことを説明し協力を得た。研究対象者には依頼文書を用いて、研究の概要、目的、意義、方法、期待される利益、予測されるリスク、質問紙調査は無記名で行い個人を特定できないように配慮すること、本研究への参加は個人の自由意思によるものであること、質問票が回収されるまではいつでも自由に参加を拒否および辞退できること、回収後は研究協力を撤回することはできないこと、拒否および辞退による不利益は一切ないこと、今後の地域での生活に影響を及ぼすことはないことを保証すること、研究データは本研究での目的以外に使用しないこと、研究データの取り扱いと破棄方法、研究成果は学会や紙面で発表する予定があることを説明し協力を得た。なお、研究対象者への質問票配布は研究協力者を通して行われるため、研究者は住所や氏名などの情報を取り扱うことはなく、個人を特定することはできない。

## V. 結 果

A地区に住む60歳から74歳までの男性を対象に自記式質問紙264部を配布し、110部の返送が確認された。(回収率41.7%)。そのうち無効回答を除いた87名(有効回答率79.1%)を分析対象とした。平均年齢(標準偏差)は69.67(3.490)歳であった。

### 1. 社会参加活動への思いの質問票の開発

「社会参加活動への思い」質問票(暫定版)の探索的因子分析を行う前に改めて質問項目を吟味し、研究者間で内的妥当性を検討した。その結果、複数の意味に捉えられる項目「自分が楽しければ良い」は削除した。そして、「地域の活動を通して健康寿命を延ばしたい」、「地域に

表1 「社会参加活動への思い」の因子分析

n=87 尺度全体のCronbachの $\alpha$ 係数=0.927

因子名 ( $\alpha$ 係数)	質問項目	因子負荷量			共通性
1. 地域への参加 (0.918)	q8_15 自由な時間を埋めたい	<b>1.011</b>	-0.212	-0.285	0.574
	q8_24 地域で男同士で気楽に交流できる場所を求めている	<b>0.967</b>	-0.014	-0.339	0.629
	q8_19 新たに同世代の仲間を作りたい	<b>0.808</b>	-0.144	0.196	0.731
	q8_23 仲間づくりのためには自分から行動する必要がある	<b>0.686</b>	0.000	-0.081	0.409
	q8_18 個人の楽しみと地域への貢献をバランスよくやっていきたい	<b>0.620</b>	-0.011	0.285	0.673
	q8_22 定年後も社会と関わりを持ちたい	<b>0.564</b>	-0.011	0.306	0.615
	q8_14 定年を期に地域の役に立ちたい	<b>0.558</b>	0.264	0.081	0.655
	q8_20 地域の人と交流したい	<b>0.536</b>	0.290	0.214	0.825
	q8_21 地域の輪を広げてお互いに刺激を与え合いたい	<b>0.533</b>	0.307	0.180	0.798
2. 地域との距離の維持 (0.851)	q8_8 もう組織で活動するのは嫌だ	0.013	<b>0.982</b>	-0.308	0.763
	q8_9 地域の活動に関わると面倒なことになる	-0.127	<b>0.943</b>	-0.017	0.738
	q8_6 地域の人との付き合いは距離を置いた方がよい	-0.010	<b>0.876</b>	-0.115	0.668
	q8_7 目立たずひっそりと地域で生きていければよい	-0.169	<b>0.781</b>	0.190	0.614
3. 成長の継続 (0.781)	q8_12 家でテレビばかり見ている生活では健康に悪影響だ	-0.309	-0.202	<b>0.938</b>	0.542
	q8_3 チャンスがある時にやってみることが大事だ	-0.025	-0.156	<b>0.859</b>	0.605
	q8_5 何歳になってもいろいろ学びたい	-0.116	0.157	<b>0.718</b>	0.540
	q8_4 目標を持ち、一生懸命がんばる精神が必要だ	0.319	-0.010	<b>0.515</b>	0.562
	q8_13 男性も地域で役に立つことができる	0.137	0.295	<b>0.496</b>	0.638

Note. 主因子法・promax回転での分析結果、5回の反復で回転が収束した。

参加する前に自分の特技を持つとよい」、「退職後は趣味中心の生活をしたい」、「自分の好きなことになる」と元気が出る」は、社会参加活動に対する思いというよりも社会参加活動の動機や結果であると考え質問項目から除いた。残る20項目について、主因子法、promax回転で因子分析を行った(表1)。ひとつの因子への負荷量が0.4以上、かつ他の因子への負荷量が0.4未満の項目を残して削除する方法で、「地域の活動の誘いがきたら喜んで参加したい」を削除した。負の因子負荷量が検出された「もう組織で活動するのは嫌だ」、「地域の活動に関わると面倒なことになる」、「地域の人との付き合いは距離を置いた方がよい」、「目立たずひっそりと地域で生きていければよい」、「地域で交流するのに気恥ずかしい気持ちがある」の5項目は反転させることとした。さらに第3因子内で他の項目と無相関となった「地域で交流するのに気恥ずかしい気持ちがある」を削除した。その結果、「社会参加活動への思い」は全18項目3因子で構

成され、第1因子9項目を「地域への参加」、第2因子4項目を「地域との距離の維持」、第3因子5項目を「成長の継続」と命名した。

信頼性は、Cronbachの $\alpha$ 係数によって内的整合性を確認した。尺度全体のCronbachの $\alpha$ 係数は0.927、第1因子～第3因子では0.918～0.781であった。I-T相関について第1因子から順に、「自由な時間を埋めたい」が0.479、「地域で男同士で気楽に交流できる場所を求めている」0.572、「新たに同世代の仲間を作りたい」0.731、「仲間づくりのためには自分から行動する必要がある」0.524、「個人の楽しみと地域への貢献をバランスよくやっていきたい」0.733、「定年後も社会と関わりを持ちたい」0.703、「定年を期に地域の役に立ちたい」0.760、「地域の人と交流したい」0.874、「地域の輪を広げてお互いに刺激を与え合いたい」0.860、「もう組織で活動するのは嫌だ」0.537、「地域の活動に関わると面倒なことになる」0.620、「地域の人との付き合いは距離を置いた方がよい」0.583、「目立たずひっそりと地域で生きていければよい」0.608、「家でテレビばかり見ている生活では健康に悪影響だ」0.236、「チャンスがある時にやってみることが大事だ」0.468、「何歳になってもいろいろ学びたい」0.539、「目標を持ち、一生懸命がんばる精神が必要だ」0.638、「男性も地域で役に立つことができる」0.722であった。

「社会参加活動への思い」質問票を作成後、改めて因子分析を行った。その結果、第1因子、第2因子、第3因子まで変化は見られなかった。

## 2. 「社会参加活動への思い」の特徴

「社会参加活動への思い」の回答の分布を図で示した(図1)。下位尺度「地域への参加」における「定年を期に地域の役に立ちたい」、「自由な時間を埋めたい」、「新たに同世代の仲間を作りたい」、「地域の人と交流したい」、「地域の輪を広げてお互いに刺激を与え合いたい」の5項目の回答の傾向として「どちらでもない」が約4割を占め、次いで「どちらかといえばそう思う」が約3割を占めた。「地域で男同士で気軽に交流できる場所を求めている」は「どちらでもない」が5割を占めた。「個人の楽しみと地域への貢献をバランスよくやっていきたい」は「どちらかといえばそう思う」が約4割を占め、次いで「そう思う」が約2割を占めた。「定年後も社会と関わりを持ちたい」、「仲間づくりのためには自分から行動する必要がある」の2項目は「どちらかといえばそう思う」が約4割を占め、次いで「どちらでもない」が約3割を占めた。下位尺度「地域との距離の維持」の4項目は「どちらでもない」約3割から約4割を占め、次いで「思わない」約2割から約3割を占めた。下位尺度「成長の継続」は、「チャンスがあるときにやってみることが大事だ」、「目標を持ち、一生懸命がんばる精神が必要だ」の2項目は「どちらでもない」が約3割から約4割を占め、次いで「どちらかといえばそう思う」が約3割を占めた。「何歳になっても学びたい」は「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」合わせて約7割を占めた。「テレビばかり見ている生活では健康に悪影響だ」は「そう思う」が約5割を占めた。「男性も地域で役に立つことができる」は「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」合わせて約8割を占めた。

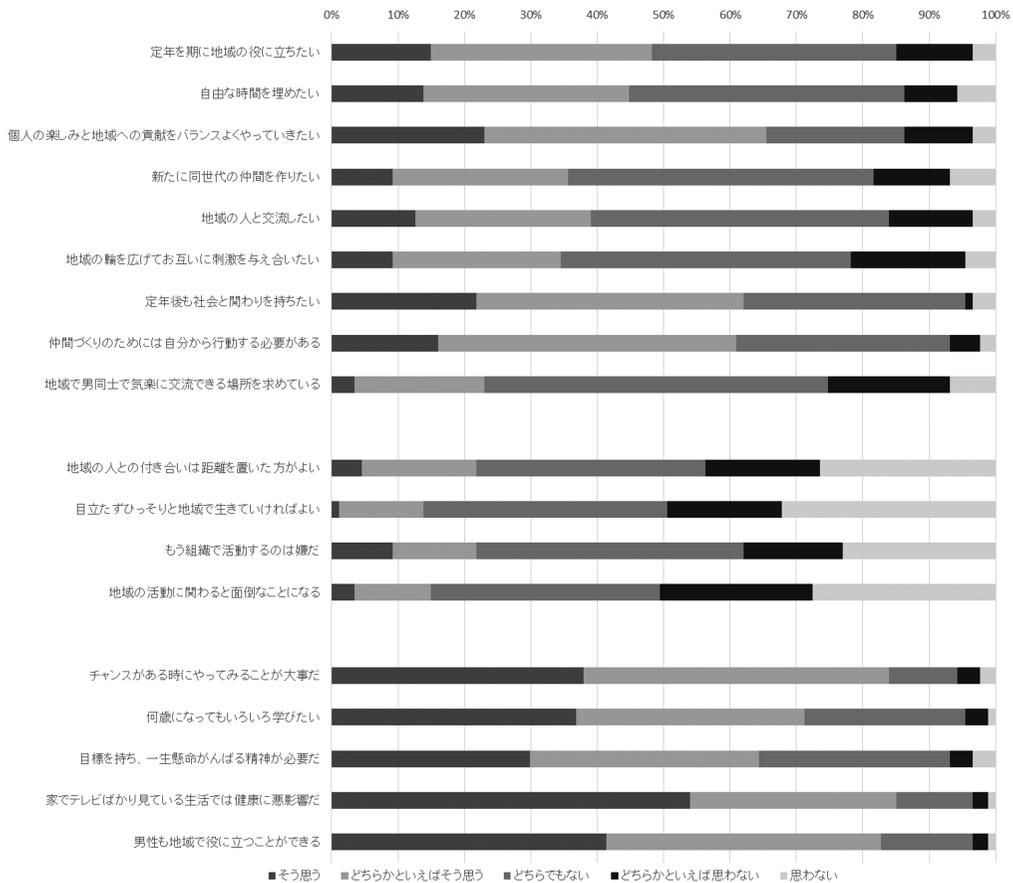


図1 「社会参加活動への思い」の回答の分布

### 3. 5歳階級別にみた「社会参加活動への思い」の特徴

年齢について5歳階級別に「社会参加活動への思い」の特徴を図に示した(図2)。

下位尺度「地域への参加」の「仲間づくりのためには自分から行動する必要がある」以外の項目は、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」を合わせた回答の割合が70～74歳が一番高く、65～69歳、60～64歳とだんだん低くなっていった。「自由な時間を埋めたい」、「地域の人と交流したい」、「地域の輪を広げてお互いに刺激を与え合いたい」の3項目は60～64歳では「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した人はいなかったが70～74歳では5割前後の回答があった。

下位尺度「地域との距離の維持」では、60～64歳は4項目とも「どちらでもない」の回答の割合が高かった。65～69歳では「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と、「思わない」、「どちらかといえば思わない」とを合わせて比較してみると概ね同じような割合となった。70～74歳は4項目とも「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」を占めた割合が60～64歳、65～69歳よりも低かった。

定年退職後の男性高齢者の社会参加活動の状態と社会参加活動に対する思いの特徴

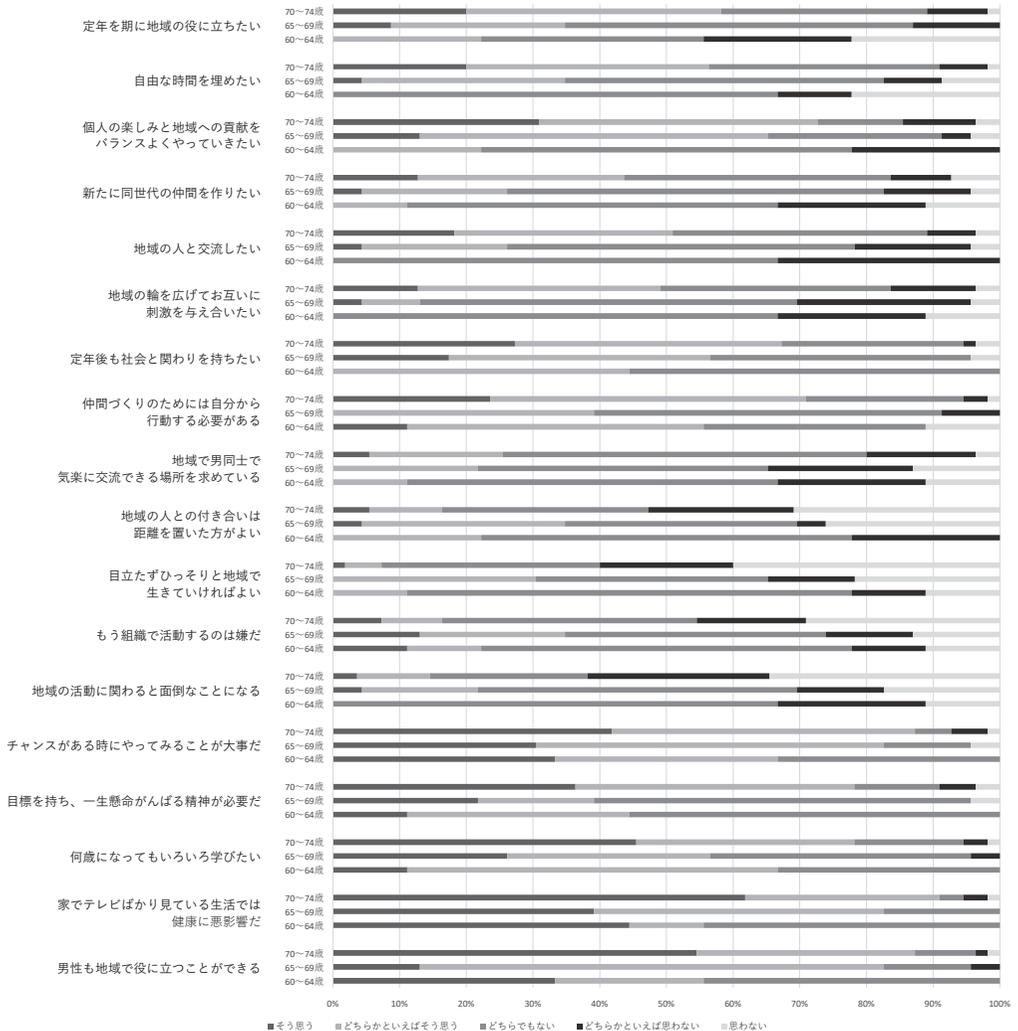


図2 5歳階級別の「社会参加活動への思い」の回答の分布

下位尺度「成長の継続」では、5項目とも60～64歳の回答に「思わない」、「どちらかといえば思わない」は見られなかった。「目標を持ち、一生懸命がんばる精神が大切だ」では70～74歳の回答は「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」で約8割占めているが60～64歳、65～69歳では約4割となった。

5歳階級別の回答について分布の偏りを確認するためカイ二乗検定を行った。その結果、「目標を持ち、一生懸命がんばる精神が必要だ」(p=0.008)、「家でテレビばかり見ている生活では健康に悪影響だ」(p=0.021)、「男性も地域で役に立つことができる」(p=0.006)、「自由な時間を埋めたい」(p=0.042)、「個人の楽しみと地域への貢献をバランスよくやっていきたい」(p=0.048)の項目はp値が0.05を下回ったが、そのすべての項目で期待度数が5未満のセルが20%を超えていたため統計学的な有意差は認めなかった。

#### 4. 居住年数による「社会参加活動への思い」の回答の特徴

居住年数を20年以上と20年未満に分け社会参加活動への思い質問票の項目の回答を比較した(図3)。「地域の人との付き合いは距離を置いた方がよい」に20年以上は「どちらかといえばそう思う」、「そう思う」の回答があったが20年未満には見られなかった。そして「目立たずひっそりと地域で生きていければよい」、「もう組織で活動するのは嫌だ」、「地域の活動に関わると面倒なことになる」については、20年以上と比べて20年未満は「どちらでもない」の割合が高かった。また、下位尺度「地域への参加」の項目の回答は20年未満の方が「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」という回答が多かった一方で「地域の輪を広げてお互いに刺激を与え合いたい」は20年以上より、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」の割合は低く、「どちらかといえば思わない」も2割程あった。

居住年数20年以上と20年未満とに分けた回答について分布の偏りを確認するためカイ二乗検定を行った。その結果、「家でテレビばかり見ている生活では健康に悪影響だ」( $p=0.030$ )、「自由な時間を埋めたい」( $p=0.025$ )の項目で  $p$  値が0.05を下回ったが、どちらも期待度数が5未満のセルが20%を超えていたため統計学的な有意差は認めなかった。

#### 5. 経済的な暮らし向きによる「社会参加活動への思い」の回答の特徴

経済的な暮らし向きについて「家計にゆとりがあり、全く心配なく暮らしている」が21人(24.1%)、「家計にあまりゆとりはないがそれほど心配なく暮らしている」が50人(57.5%)、「家計にゆとりがなく、多少心配である」が14人(16.1%)、「家計が苦しく、非常に心配である」が2人(2.3%)であった。「家計にゆとりがあり、まったく心配なく暮らしている」、「家計にあまりゆとりはないが、それほど心配なく暮らしている」は心配ない、「家計にゆとりがなく、多少心配である」、「家計が苦しく、非常に心配である」を心配であるとして回答の比較をした(図4)。下位尺度「地域への参加」の項目は心配である群の方が心配ない群よりも「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」の回答の割合が高かった。特に、「定年を期に地域の役に立ちたい」が心配である群が「そう思う」と回答した割合は3割を超えており他の属性よりも高かった。

経済的な暮らし向きについて心配ない群と心配である群とに分けた回答について分布の偏りを確認するためカイ二乗検定を行った。その結果、有意差は認めなかった。

#### 6. 主観的健康感による「社会参加活動への思い」の回答の特徴

主観的健康感について、「よい」が13人(14.9%)、「まあよい」が57人(65.5%)、「あまりよくない」が14人(16.1%)、「よくない」が3人(3.4%)であった。「よい」、「まあよい」は健康、「あまりよくない」、「よくない」は健康でないとして回答の傾向を比較した(図5)。全体的に健康でない群は「思わない」の回答が健康群よりも多かった。「地域の人との付き合いは距離を置いた方がいい」は健康群で「そう思う」の回答は3割だったのに対して、健康でない群は1割程

定年退職後の男性高齢者の社会参加活動の状態と社会参加活動に対する思いの特徴

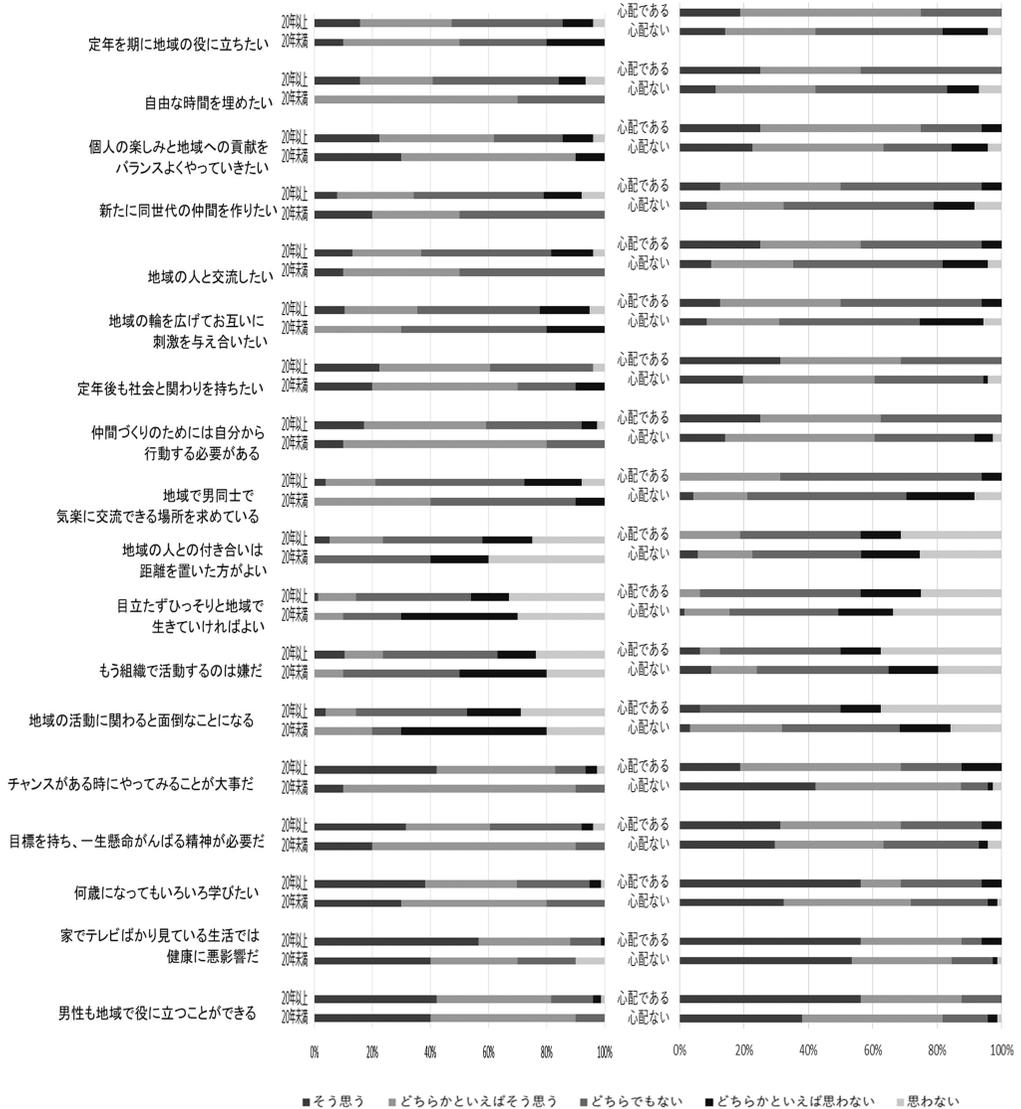


図3 居住年数による「社会参加活動への思い」の回答の分布

となった。「定年を期に地域の役に立ちたい」は、健康でない群の「そう思う」の回答が2割を超えており他の属性よりも高かった。

主観的健康感について健康群と健康でない群とに分けた回答について分布の偏りを確認するためカイ二乗検定を行った。その結果、「チャンスがある時にやってみることが大事だ」(p=0.006)の項目はp値が0.05を下回ったが、期待度数が5未満のセルが20%を超えていたため統計学的な有意差は認めなかった。

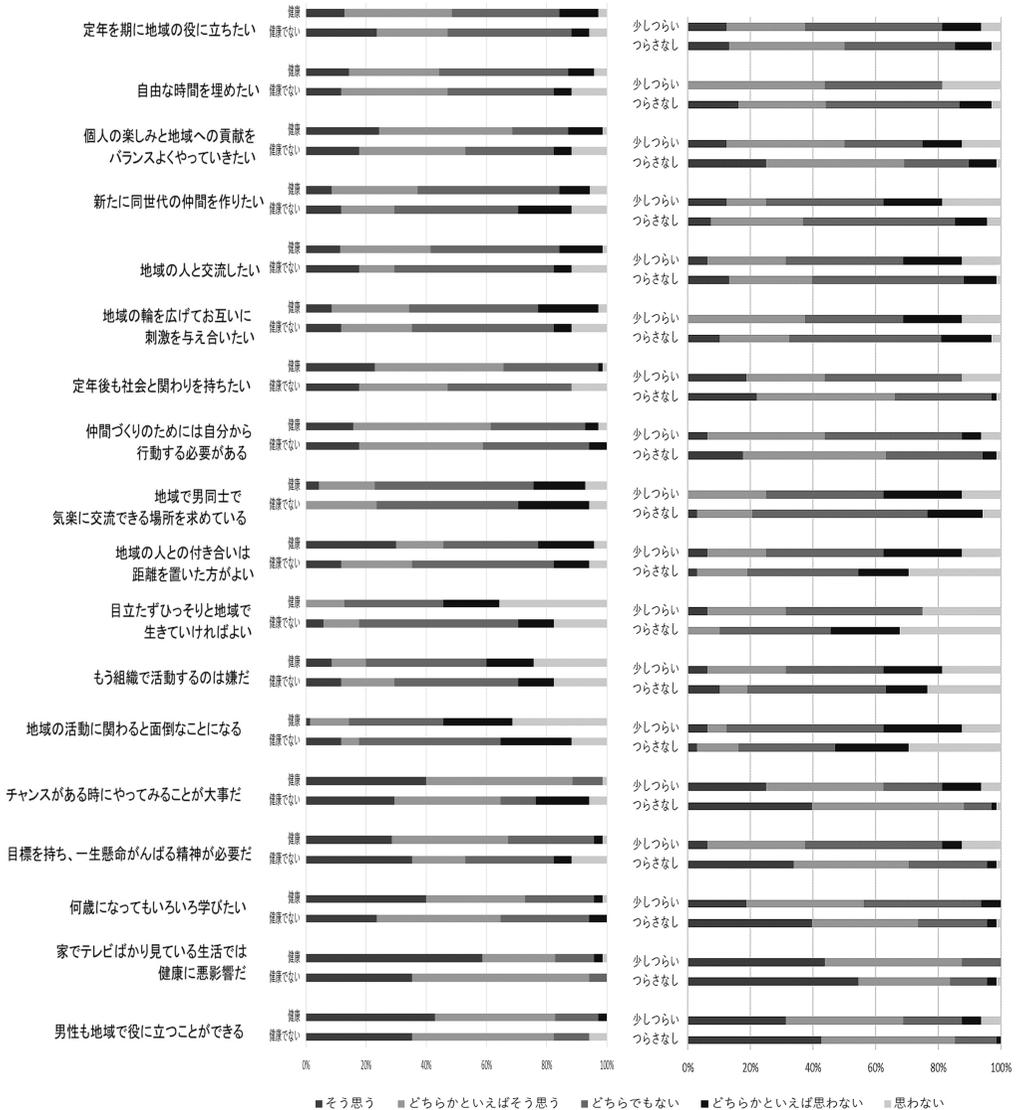


図5 主観的健康感による「社会参加活動への思い」の回答の分布

図6 外出時の身体のだらさによる「社会参加活動への思い」の回答の分布

## 7. 外出時の身体のだらさによる社会参加活動への思いの回答の特徴

外出時の身体のだらさについて、「外出することはだらくない」が68人(78.2%)、「外出できるが少しだらい」が16人(18.4%)、「外出できるがかなりだらい」と「外出できないほどだらい」は0人となったため、回答者のいた2つの項目で2群に分けて比較した(図6)。回答の傾向としては主観的健康感の健康群と外出のだらさがない群、健康でない群と外出できるが少しだらい群とは回答の傾向が似ていたが、「地域の人との付き合いは距離を置いた方がいい」は外出のだらさがない群、外出できるが少しだらい群の「そう思う」の回答は1割にも満たな

かった。

外出時の身体のつらさについて外出のつらさがない群と外出できるが少しつらい群とに分けた回答についてカイ二乗検定を行った。その結果、「目標を持ち、一生懸命がんばる精神が必要だ」(p=0.041)、「目立たずひっそりと地域で生きていければよい」(p=0.034)、「自由な時間を埋めたい」(p=0.029)の項目はp値が0.05を下回ったが、期待度数5未満のセルが20%を超えていたため統計学的な有意差は認めなかった。

## 8. 社会・奉仕活動の状況

社会活動性指標の社会・奉仕活動の平均点(標準偏差)は2.88(1.860)点であった(表2)。Kruskal-Wallis 検定を行った結果、5歳階級別において有意差は認めなかった。

表2 社会・奉仕活動の平均値

	n	平均	標準偏差
60～64歳	9	2.56	1.944
65～69歳	19	2.63	1.674
70～74歳	47	3.04	1.933
全体	75	2.88	1.860

次に、社会・奉仕活動の6項目の活動の頻度を5歳階級別に比較した(図7)。地域行事は、60～64歳が他の世代よりも活動していない割合が高かった。町内会活動は「ほとんどない」、老人会の活動は60～64歳は1

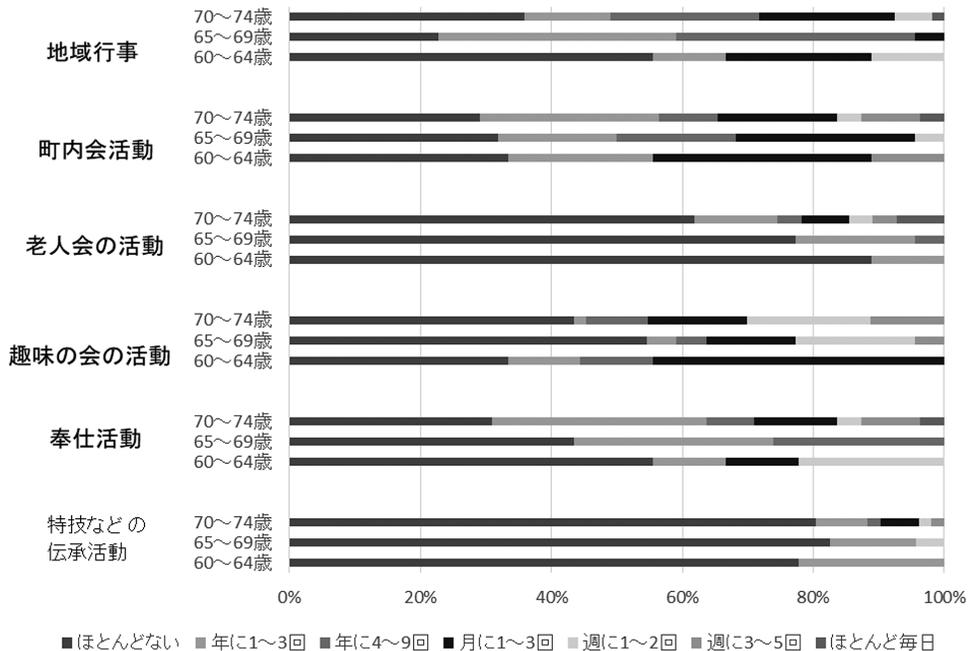


図7 5歳階級別にみた社会・奉仕活動の状況

割、65～69歳では2割であるが、70～74歳では4割ほど参加していた。さらに70～74歳ではいろいろな頻度で活動していた。趣味の会の活動は60～64歳では7割、65～69歳は4割、70～74歳は6割が活動しており、65歳以上では「週に3～5回」以上活動している人もいた。奉仕活動は、60～64歳から、65～69歳、70～74歳と年代が上がるにつれて活動している割合が高くなっていった。特技などの伝承活動は「ほとんどない」の割合はどの年代もほぼ同じで8割ほどを占めた。社会・奉仕活動の活動頻度を5歳階級別で分け、分布の偏りを確認するためカイ二乗検定を行った。その結果、奉仕活動( $p=0.026$ )で  $p$  値が0.05を下回ったが、期待度数が5未満のセルが20%を超えていたため統計学的な有意差は認めなかった。

## VI. 考 察

統計学的に有意な分布の偏りではなかったことから、本研究では母集団を推定せず、本研究の分析対象となった定年退職後の男性高齢者のみに限定して、社会・奉仕活動の状態と社会参加活動に対する思いと属性による特徴、また、その思いに応じて社会・奉仕活動への参加を促す方策を考察する。

### 1. 定年退職後の男性高齢者の社会参加活動の状態と社会参加活動に対する思いについて

#### 1) 社会参加活動の状態について

社会・奉仕活動得点の平均得点は、大川(2019)の調査より低く、岡本、岡田、白澤(2006)の調査よりも高かった。それは、本研究の対象者は高齢者の集まりに参加している人と縁者を通じた高齢者であり、企業のOB会に自発的に出席している積極的な集団(大川, 2019)や、大都市で無作為抽出された高齢者(岡本ら, 2006)とは、対象者の特性が異なったことが関係していると考えられた。

5歳階級別に社会・奉仕活動の状況を見ると、町内会活動や奉仕活動、老人会の活動について、年代が上がるごとに参加している人が増えていた。東京都福祉保健局(2021)の「高齢期における地域活動等の意向」についての調査結果でも地域自治的活動や社会貢献・福祉的活動は60歳代よりも70歳代の方が活動している割合が高く、本研究結果と符合すると考えられる。また、70歳未満では、地域に住んでいると参加が求められる地域の行事や町内会や自治会などには参加していることが伺えた。ある程度自らの意思によって参加すると考えられる老人会活動、趣味の会の活動、奉仕活動、特技などの伝承活動では各項目において活動していない割合が高い傾向にあると考えられた。その中で趣味の会の活動は他の項目よりもやや高い頻度で参加していたことから、社会・奉仕活動の中ではどの年代でも活動しやすいのではないかと考える。しかし60～64歳は10人以下であり、少数の対象者特性が反映されている可能性に留意する必要がある。

社会・奉仕活動の参加の頻度は月1回以上活動している人は67.8%であった。これは、令和

元年度高齢者の経済生活に関する調査(内閣府政策統括官, 2020)で社会的な活動について自治組織の活動や趣味やスポーツを通じたボランティア・社会奉仕活動をしているのが20%前後、「特に活動はしていない」が63.3%となっていることと比べて、活動している割合が高いと考えられる。その理由として、今回質問紙を高齢者の集まりに参加している人とその縁者などに配布したことによるものと考えられる。

## 2) 社会参加活動に対する思いについて

「社会参加活動への思い」の下位尺度「地域への参加」については、地域の役に立ちたい、地域の人と交流したいなどはどちらでもないとする回答が多く、「個人の楽しみと地域への貢献をバランスよくやっていきたい」は肯定的な回答が多かったことから、地域や社会への関わりも持ち、自分のことばかりになってしまわないようにしたいという思いがあると推察した。「地域との距離の維持」では地域や組織で活動することや、地域の人と関わることを避けたいということに対して肯定的でも否定的でもない思いが表れており、地域とのかかわりは必要ではあるが深くかかわりたいわけではない思いが表れたと考えられた。「成長の継続」については他の下位尺度よりも「どちらかといえばそう思う」、「そう思う」の回答が多くなった。その理由として希望や心持ちで回答していることも考えられた。

## 2. 年齢、居住年数、経済的な暮らし向き、主観的健康観、外出時の身体のだらみによる社会参加活動に対する思いの特徴

### 1) 年齢と「社会参加活動への思い」

5歳階級別に「社会参加活動への思い」をみると、下位尺度「地域への参加」の肯定的な回答は70~74歳が60歳代よりも高かった。東京都福祉保健局(2021)の定年退職後生活をどのように送りたいと思うかの調査で、地域活動や社会貢献をしたいという割合は70歳代が72.9%で60歳代は52.6%であった。本研究の結果に符合していると考えられた。

下位尺度「地域との距離の維持」では60~64歳で「そう思う」とする回答の割合が他の年代よりも低い傾向にあった。しかし先述の通り、下位尺度「地域への参加」をみると60~64歳の肯定的な回答は他の年代に比べて低かった。東京都福祉保健局(2021)の調査では、地域活動や社会貢献、趣味的活動などを行わない理由として、60歳代は仕事をしているからが60%以上占めている。吉野(2015a)は、定年退職後の男性の地域活動への態度に影響する要因の1つとして仕事に伴う精神的・時間的縛りから解放されることを上げており、本研究の結果で60~64歳に比べて70~74歳の方が時間的な余裕ができ、地域との関わりを持っていたいという思いがあることが伺えた。本調査は横断的であるため時間的な変化なのかは明らかにできないが、このような年代別の特徴についてそれぞれの年代に合わせて70歳代前半には地域での活動を勧めて、60歳代前半には負担にならない程度から地域内の活動にも興味を持ってもらえるように参加を促すことが有用ではないかと考える。

## 2) 居住年数と「社会参加活動への思い」

居住年数を20年未満と20年以上で分けて「社会参加活動への思い」の項目の回答の傾向をみると、下位尺度「地域との距離の維持」の項目に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した割合が居住年数20年以上の人の方が多かった。居住年数が20年未満の人は20年以上の人よりも地域の人との付き合いは大事にし、地域との関わりを持ちながら生きていきたいという思いを持っている人の割合が高いと考えられた。横浜市(2022)の地域とのつながりの調査結果では居住年数が5年未満の場合、「顔もよく知らない」が35.7%であるが居住年数が長くなるとその割合が減少し45年以上になると4.8%となっている。このことから、20年以上生活している人にはそれ未満の人よりも顔見知りの関係が築かれている分、関わりたくないという思いも持っているのではないかと考えられた。したがって、20年未満の居住年数の人には地域の同年代の人との交流ができる場を設けて、まずは関係づくりの支援が必要と考えられた。

## 3) 経済的な暮らし向きと「社会参加活動への思い」

経済的な暮らし向きについて、高齢社会白書令和元年版では、「家計にゆとりがあり、全く心配なく暮らしている」15.0%、「家計にあまりゆとりはないがそれほど心配なく暮らしている」49.6%、「家計にゆとりがなく、多少心配である」26.8%、「家計が苦しく、非常に心配である」8.1%であった(内閣府, 2019)。このことより、今回の研究対象者はやや生活に心配なく暮らしている人が多い傾向であった。

「定年を期に地域の役に立ちたい」の項目で、心配である群の「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」が高かった。社会活動性指標の学習活動の点数が高い人がいることや自由記述で自治会活動、ボランティア、趣味の会の仲間との交流などを行っていることがあった。本田ら(2010)は、自主活動の参加頻度と経済状況に有意な関連は認めなかったとしている。一方で井手、辻、渡邊、横山、飯塚、近藤(2021)は、男性高齢者の所得によってスポーツの参加は高所得層と比べ、低所得層は低く、サロンや趣味・ボランティアグループでは有意な差はみられず、有意な差はないもののボランティアグループは低所得層において参加が多かったと述べている。よって経済的な背景を考慮して各々が求めている活動の形を提案していく必要があると考えられた。

## 4) 主観的健康感、外出時の身体のつらさと「社会参加活動への思い」

主観的健康感 は2群に分けると良い群が約8割、良くない群が約2割であった。金ら(2004)の調査では「非常に健康」が10.4%、「まあ健康」が70.9%、「あまり健康でない」が15.2%、「健康ではない」が3.9%であり、同様の傾向であった。

外出時の身体のつらさは、桂、佐藤(2017)の研究では外出時の身体のつらさがあるのは28.8%、ないのは71.2%であり、本研究の結果の方が身体のつらさがない割合がやや高かった。

その理由として本研究の対象者が75歳未満であったためと考えられた。

健康群は「地域の人との付き合いは距離を置いた方がよい」と思う人の割合が健康でない群や他の属性よりも高かった。それに比べて外出時の身体のだらさによる回答の傾向では1割にも満たなかった。その理由として健康であることで自立した生活を送れていることが背景にあると考えられ、それが今回の結果につながったのではないかと推察した。「定年を期に地域の役に立ちたい」は健康でない群の方が肯定的な回答の割合が高かった。先行研究では社会・奉仕活動と主観的健康感の関連は見られていない(金ら, 2004)ことから、健康でなくても地域に貢献したい思いを持っていることが推察できた。

2つの属性に共通して、全体的に健康でない群と外出時の身体のだらさがある群は、「思わない」という回答が健康群、外出時の身体のだらさがない群よりも多かった。しかし、健康でないと感じている人は、地域の役に立ちたい思いが他の属性よりも高かった。疾患をもっている人も疾患をもたない人と比べて一部の種類を除き社会参加の参加率が維持または上昇する(西田, 堀井, 筒井, 平, 2006)ことと符合する結果であると考えられた。身体的な負担を考慮して、社会参加活動の提案や支援の在り方の検討の必要性が考えられた。

### 3. 社会参加活動に対する思いの特徴に応じた社会・奉仕活動への参加を促す方策

属性による特徴として、「地域への参加」については20年以上居住している人、健康と感じている人、外出時身体のだらさがない人がそうでない人に比べて肯定的な回答の割合が高かった。経済的な暮らし向きについては心配のある人の方が肯定的な回答の割合が高かった。また、「地域との距離の維持」については、20年未満の居住している人は付き合いを大事にしていきたいと思っている傾向があり、健康と感じている人は近所付き合いに距離を置きたいと思っている人もいた。新鞍ら(2022)は、町内会活動の参加について独居の女性の不参加が少なかったとしている。また、内閣府(2022)の世論調査で、望ましい地域との付き合いの程度として30歳未満は挨拶する程度が約4割を占めているが、年代が上がる毎にその割合は減少し、地域の行事や会合に参加し、困ったときに助け合うや、地域の行事や会合に参加する程度の付き合いの割合が増加してきている。このように自身の置かれている環境に不安をもつ属性の人が社会につながりを持ちたいとする思いが表れているのではないかと推察された。内閣府政策統括官(2020)は、現在社会的な活動をしていない人の主な理由として「体力的に難しい」「時間的な余裕がない」があり、活動の意思はあるが活動していない人の主な理由も同じであったと述べている。その他に活動する仲間がいない、誘いがいない、情報がないなども理由としてあった。茨木、李、加瀬(2017)は中高年の社会活動の情報源として公的地域情報誌が有用であると述べている。また、健康度別の内容や、仲間づくりやボランティア活動などの目的別の内容、経済的に負担のない内容など各々にあった活動を選択できるように充実させ、情報のツールを活用して周知していくことが必要であると考えられる。

## Ⅶ. 研究の限界と今後の課題

考察の冒頭に述べたように、統計学的に有意な分布の偏りはなく、結果及び考察は本研究の対象者にしか適用できない。今後は対象を拡大し、どんな思いをもった人が実際にどんな社会参加活動を行っているのか、関連を検討していく必要がある。

社会参加活動は多様であり、回答者の想定する社会参加活動によって社会参加活動への思いが異なった可能性がある。研究対象者が回答しやすい質問項目を検討していく必要がある。

今後社会参加活動に対する思いの属性に特徴に合わせた具体的な支援方法を発展させていくことが求められる。

## Ⅷ. 結 論

本研究では、定年退職後の男性高齢者の社会・奉仕活動の状態は年代によって異なり、60歳代よりも、70歳代前半の方が参加していた。

社会参加活動に対する思いを属性によって比較したところ、20年以上居住している、健康である、外出時の身体のつらさがない、暮らし向きに心配があることが対比する群よりも「地域への参加」に肯定的な思いを持っていた。

### 謝辞

研究にご協力いただいた社会福祉協議会の皆様、アンケートにご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。なお、本研究は、京都橘大学大学院博士前期課程に提出した論文の一部を、修正したものである。

### 引用文献

- 船山和志, 堀口逸子, 辻本愛, 丸井英二. (2007). 横浜市k区における前期高齢者の健康づくりに関連する要因について. 順天堂医学, 53(3), 438-445.
- 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 柴崎智美, 永井正規, 川上憲人, ...大野良之. (1997). 高齢者における社会活動状況の指標の開発. 日本公衆衛生雑誌, 44(10), 760-768.
- 本田春彦, 植木章三, 岡田徹, 江端真伍, 河西敏幸, 高戸仁郎, 犬塚剛, 荒山直子, 芳賀博. (2010). 地域在宅高齢者における自主活動への参加状況と心理社会的健康および生活機能との関係. 日本公衆衛生雑誌, 57(11), 968-976.
- 茨木裕子, 李泰俊, 加瀬裕子. (2017). 中年期の老後観、老後の準備行動および情報活用と社会活動への参加との関連—中年前期群と中年後期群および高齢期群との比較検討—. 老年社会科学, 39(3), 316-329.
- 井手一茂, 辻大士, 渡邊良太, 横山芽衣子, 飯塚玄明, 近藤克則. (2021). 高齢者における通いの場参加と社会経済階層—JAGES横断研究—. 老年社会科学, 43(3), 239-251.
- 片桐恵子. (2012). 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会.
- 桂理江子, 佐藤直由. (2017). 地域在住高齢者における社会活動の関連要因—仙台市を事例として—. 保健福祉学研究, 15, 1-10.
- 金貞任, 新開省二, 熊谷修, 藤原佳典, 吉田祐子, 天野秀紀, 鈴木隆雄. (2004). 地域中高年者の社会参

- 加の現状とその関連要因—埼玉県鳩山町の調査から—。日本公衆衛生雑誌, 51(5), 322-334.
- 北島洋美, 加藤愛美, 横山順一. (2018). 定年退職男性が健康づくりを目的とする地域活動に参加・継続する要因。日本体育大学紀要, 47(2), 109-119.
- 厚生労働省. (2013). 地域包括ケアシステムの5つの構成要素と「自助・互助・共助・公助」. [https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link1-3.pdf](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link1-3.pdf) 2022.9.3閲覧可能
- Nonaka, K., Suzuki, H., Murayama, H., Hasebe, M., Koike, T., Kobayashi, E., Fujiwara, Y. (2017). For how many days and what types of group activities should older Japanese adults be involved in to maintain health? A 4-year longitudinal study. PLoS One, 12(9), e0183829. doi: 10.1371/journal
- 長徳友美, 極本絵里子, 柴田しおり, 田中理子, 織田初江, 細見博志. (2007). 健康づくり推進員活動を行う退職後男性の捉えるサクセスフルエイジング。金沢大学つるま保健学会誌, 31(1), 85-88.
- 内閣府. (2019). 令和元年版高齢社会白書(全体版). [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/html/zenbun/s1\\_1\\_1.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/html/zenbun/s1_1_1.html) 2022.9.4閲覧可能
- 内閣府. (2022). 世論調査令和3年社会意識に関する調査. <https://survey.gov-online.go.jp/r03/r03-shakai/zh/z08.html> 2022.9.4閲覧可能
- 内閣府政策統括官. (2020). 「高齢者の経済生活に関する調査」第2章調査結果の概要. <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/r01/zentai/pdf/s2.pdf>
- 新鞍真理子, 関根道和, 山田正明, 立瀬剛志, 木戸日出喜, 鈴木道雄. (2022). 地方都市在住の高齢者における社会活動への不参加に関連する要因—富山県認知症高齢者実態調査の結果から—。日本公衆衛生雑誌, 69(6), 435-446.
- 西田厚子, 堀井とよみ, 筒井裕子. (2006). 自治体定年退職者の退職後の生活と健康の関連に関する実証研究。人間看護学研, 4, 75-86.
- 岡本秀明, 岡田進一, 白澤政和. (2006). 大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因—身体、心理、社会・環境的要因から—。日本公衆衛生雑誌, 53(7), 504-515.
- 小野寺紘平, 齋藤美華. (2008). 高齢男性の介護予防事業への参加のきっかけと自主的な地域活動への継続参加の要因に関する研究。東北大学医学部保健学科紀要, 17(2), 107-116.
- 大川法子. (2019). 定年退職後の社会活動への参加に影響を与える関連要因。キャリアと看護研究, 9(1), 13-21.
- 総務省. (2022). 人口推計(2021年(令和3年)10月1日現在). <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2021np/index.html> 2022.9.4閲覧可能
- 玉腰暁子, 大野良之, 清水弘之, 五十里明, 橋本修二, 坂田清美. (1994). 全国市町村における高齢者の社会活動に関する実態調査の実施状況。公衆衛生, 58(10), 738-742.
- 東京都福祉保健局. (2021). 「高齢期における地域活動等の意向」について. [https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2021/03/29/documents/19\\_02.pdf](https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2021/03/29/documents/19_02.pdf) 2022.9.1閲覧可能
- 東京都健康長寿医療センター. (2018). 介護予防につながる社会参加活動等の事例の分析と一般介護予防事業へつなげるための実践的手法に関する調査研究事業報告書. [https://www.tmg Hig.jp/research/info/cms\\_upload/455219515829a9ab1e80af0bc61f3b33.pdf](https://www.tmg Hig.jp/research/info/cms_upload/455219515829a9ab1e80af0bc61f3b33.pdf) 2022.9.3閲覧可能
- 山元智穂. (2016). X社会参加を促す援助。亀井智子(編), 新体系看護学全書老年看護学②健康障害をもつ高齢者の看護(pp.118-124)。メジカルフレンド社.
- 横浜市. 令和3年度横浜市民意識調査4. 地域におけるつながり. [https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/seisaku/torikumi/shien/shiminisiki/ishiki2021.files/0027\\_20220329.pdf](https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/seisaku/torikumi/shien/shiminisiki/ishiki2021.files/0027_20220329.pdf) 2022.9.4閲覧可能
- 吉野純子. (2015a). 定年退職後の男性が地域の中でつながりを築いていくプロセスに関する研究。医療の広場, 55(4), 4-8.
- 吉野純子. (2015b). 首都圏在住の定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく理論の生成(博士論文). [http://arch.luke.ac.jp/dspace/bitstream/10285/13097/6/DN%5Bk129%5D\\_full.pdf](http://arch.luke.ac.jp/dspace/bitstream/10285/13097/6/DN%5Bk129%5D_full.pdf)